**「今日も主が」 2017/4/16**

**マタイ28:1-10 牧師: 安達均**

今日主の復活の事実を実感し、主の恵みと平安がここに集まった人々の中に満たされますように。

A1: 聖週間をどのように過ごされていただろうか。私は洗足の木曜日の説教準備、聖金曜日礼拝でのブラッド牧師のメッセージの翻訳、そして本日の説教の準備、さらに一ヶ月後に控えた教区のアッセンブリーへの準備をしている真っ只中、いろいろ気になるニュースが飛び込んできて、心を乱されることが多かった。

A2: 発端はシリアのアサド政権が罪なき市民を犠牲にする化学兵器使ったというニュースが流れた。そしてわたしたちの住んでいるアメリカという国家は大統領の判断で、シリア軍施設を爆撃した。しかしシリア政府もロシア政府も、アサド政権が化学兵器をつかったというのはでっち上げだという。

A3: なにが本当なのかは、通常の市民にはわかりかねるが、それにしても、世界の政治情勢は悪化の一途をたどっているようにも思える。北朝鮮の問題の報道にしても、日本を含めた東南アジア地域やアメリカ本土すらも市民生活の舞台が爆撃の標的になってしまうのではないかという報道が過剰なまでに聞こえてきて、不安をあおられているような気がする。

A4; 聖週間になぜ、こんなに状況がどんどん悪くなってしまうのかということを考えさせられた。思い起こすなら、イエスキリストが十字架にはりつけにされる過程も、どんどん状況が悪化していった。

B1: 今日の聖書箇所に出てきているマグダラのマリアたちも、実は先週の私たちと同じような思いをもっていたのではないだろうか。大きな期待の中でエルサレムに入城したイエスだったが、どんどん状況は悪化していった。一般市民も皆一丸となってイエスの十字架刑に賛同し、結末は、イエスの十字架刑執行、イエスの死、イエスの埋葬だった。

B2: 主と仰いだイエスがなんでこんなことになってしまったのか？　３年間イエスに従った日々はただの夢でしかなかったのか。日曜日の朝は、マリアたちは、イエスの遺体を確認し、せめて香油を塗って弔おうとして墓に向かった。

B3: しかし、ストーリは、イエスの埋葬で終わっておらず、話しの続きがあった。まず、マリアたちが墓に近づくと大地震がおこる。そして天使が現れ、マリアたちに話しかける。「恐れることはない。イエスは復活してガリラヤに行かれる。」

B4: マリアたちはそんなことを言われてもなかなか信じられなかったのではないだろうか？あまりにも非現実的であり、まだイエスの復活した姿は見ていなかったから。　聖書の言葉では「婦人たちは、恐れながらも大いに喜び」と表現されている。「大きな喜び」とは表現されているが、彼女たちは恐れていた。半信半疑という言葉に相当するように思う。半信半疑では、やはり本当の喜びには到達していないのだと思う。

C1: この半信半疑の状況から、マリアたちが解放されることが起こる。　それは、天使にあったことさらにイエスの遺体が墓にはなくなっていたことを弟子たちに伝えに行こうと急いで走っている途中に、イエスに出会うということが起こっている。

C2: イエスはマリアたちの行く手に立っている。そして日本語訳では、「おはよう」とマリアたちに話しかけている。　マリアたちにとっては急いでいたので、なんかじゃまをするように立ちはだかって、最初はただだれかがつきなみに「おはよう」と話しかけたように感じたかもしれない。

C3: しかし、この時のイエスの言葉の意味はもっと大きかったのだと思う。ギリシャ語の聖書には、「カイレテ」という言葉が使われていたが、それにはもっと深い意味がある。どんな意味があるかご存知だろうか。

C4: 「喜べ」という意味だ。つまり、まだ恐れていて、半信半疑での喜びでしかなかったマリアたちをすべてお見通しで、ずばり「喜べ、恐れることはない。」と話してくださる、復活した主イエスがそこに立ちはだかっていた。

D1: 今年の復活物語、２１世紀を生きるキリスト教徒に何を語っているのだろうか？　半信半疑だったマリアたちと、同じような状況におかれている私たち自身を覚える。

D2: 教会に集うようになり毎週教会に来るようになった、しかし、中身は１００パーセント喜んでいない、つまり復活をただのキリスト教の歴史にしてしまっている方々が多いのが現実なのだと思う。マリアたちに２０００年前に現れ「喜べ、恐れることはない。」と言ってくださったイエスの出来事は、２０００年前に完結してしまったわけではない。

D3: これまで２０００年間続いているキリスト教会また今後も紆余曲折があっても存続し続けるであろうキリスト教会に集う民は、イエスの話された通りの洗礼、聖餐式を受ける生活を送る。　それは、どんな不安でまた生活に追われた生活を送っているなかでも、また世の中がどんな不安定な状況に置かれていようが、イエスが二人のマリアに立ちはだかれたように、主の復活された日に、つまり日曜日が必ず立ちはだかってくださってり、さまざまな日々の生活から離れ礼拝という場に導かれる。

D4: そして礼拝において思い切ってそのパンとぶどう酒にイエスが存在してくださっていると確信して、聖餐にあずかる時に、今日も復活の主が「喜べ、怖がることはない」といって、復活の主自らが私たちの間にやどってくださり、主とともに日々の生活に送りだされる。

アーメン